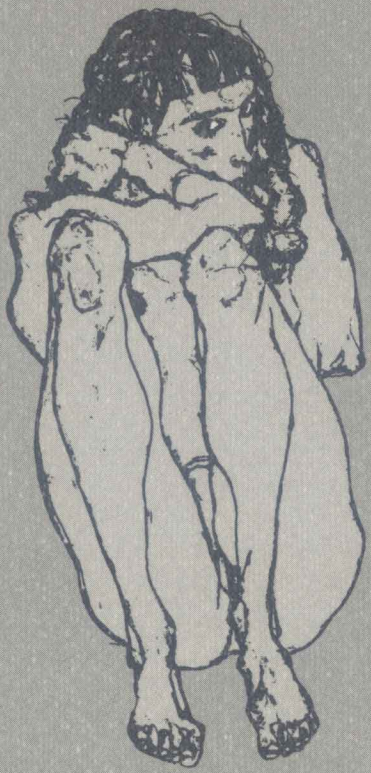
霧の中

佐川一政



話の特集

霧の中

一九八三年　九　月十日　第一刷発行
一九八三年十一月一日　第十六刷発行
定価　一〇〇〇円
著者　佐川一政
発行者　矢崎泰久
装幀者　平野甲賀
発行所　株式会社　話の特集
東京都渋谷区神宮前四―三〇―六
電話　〇三（四〇五）〇八一〇
印刷　株式会社　大竹美術
製本　株式会社　小泉製本所
©1983 Issei Sagawa, Printed in Japan
小社の許可なくして、本書の一部を引用し、転用転載あるいは上演、放映、上映することを厳重に禁止します。
〈検印略〉落丁本、乱丁本は本社にてお取替えします。

霧の中

佐川一政

話の特集

霧の中

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

霧の中
第一章 9
第二章 14
第三章 43
第四章 102
第五章 123
第六章 142
解説 174
佐川一政年譜 208
付・川端康成　日本と西洋との間 216

霧の中

『霧の中』と題し、一ジャーナリストが、独房を訪ねてくるという架空の枠組を設けたものの、描かれた事象そのものは、記憶の底に鏡をあてて、照らしたものばかりです。

佐川一政

第一章

私が偶々ドキュメンタリストとして、この事件に関係することになったのは、まだその事件の余波が、世の中を何となくざわつかせている頃でした。ある夏の初めの、かなり涼しい一日、私は、この犯人を、パリの南東部にある、その独房に訪ねたのです。

古い石づくりの、この刑務所の中を、看守に伴われながら、右へ左へと歩かされていくうちに、二階三階まで吹きぬけになった、鉄格子が白いクリーム色のペンキにぬられた建物の一隅に、「43」と、薄い青色でかかれた文字の、小さな扉の前でようやく私は止められました。

入口から付き添ってきた背の高い看守は、館中に轟き渡る様な音をたてて扉を開くと、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

横に狭いその小さな部屋の左にすえられたベッドの上に、彼はこちらを向いて、ちょこんと座わっていました。ちょうど窓がその背後にあり、そこからさす光が彼の顔に影をつくっていました。彼は、おどろいた様にこちらを見ながら、少しひきつる様な微笑を口のまわりにつくって、軽く会釈しようとしました。

頭だけが大きく、その部分だけは、三十を過ぎた大人です。どこか人を寄せつけぬところがあります。そしてまなざしは、何かおどおどしています。その印象をはねのける様に、私が勢いよく手を差し出すと、その中に、冷たい、ひ弱な指がすべり込んできました。その手の小ささに、私はいささかおどろきながら、しかし、無関心な風を装って、思い切り明るい笑顔をつくり、彼の腰かけていたベッドに、どんと座わりました。

そして今まで私の右手にあった壁に向かい合って、一瞬声をたてそうになりました。そこには、事件の記事が、大きな彼女の写真を中心にして、パネルのまわりに、ぎっしりとはさみ込んであったのです。毎日これを眺めて過ごしているのでしょうか……。

「あなたの記事ですね」

「ええ」小さな、文字通り蚊の鳴く様な声で、彼は答えて、

「集めているんですよ」

「御自分の記事を？」

「ええ。興味があるものですから……」

私は、この妙な答えにふたたびおどろきながら、

「有名人ですからね、いまやあなたは」
「とんでもない有名人ですよ」と、今度は、明らかな笑い顔をつくって答えました。その笑った目の中に、今までとは違った、意外な人なつっこさをみ、また同時に、どこかひどく子供っぽいそぶりをみました。
　私がここにくる前に、何人かの彼の友達だったという人の話を思い出していました。つきあっていると彼にはどこか、支えずにはいられない様なところがあったというのです。それがあるいは、彼らの心をつなぎとめていた一つの大きな原因だったのかも知れません。私もその〝わな〟にはまりそうになる自分を感じながら、
「既におききおよびと思いますが、私は日本のある出版社から派遣されてきた雑誌記者です。あなたのことを取材してこいというのが命令でしてね」と、ふたたび笑おうとしましたが、何故かそのまま笑いがのどの奥にひっこんでしまうのを感じました。
「御存じでしょうか？　ヨーロッパ訪問の途上にある首相の耳にまで、わざわざこれに関して、日本の外務省から報告が飛んだということですよ」
「少しフランスの新聞で読みました」彼は静かにそう答えて、
「皆さんに、大変な御迷惑をかけてしまって……」といいかけ、
「しかし、こんな大騒ぎになるとは……」と、急に笑い声をたてて、たまらなくなった様に、苦笑とも皮肉ともとれる笑顔をつくりました。私はそこに、このもの静かな青年の奥に秘む不敵さを垣間見た様で、少々不愉快な気分が、胸をよぎりました。そこでおかまい

なしに、
「皆が、これはフランスも日本も同じですが、あなたの真意をさぐろうとしています。とにかく、前代未聞の怪事件ですからね」
「心理学者も、いろいろ言っている様ですね。こちらの新聞にも、こういった記事がいろいろ出ています」
「ところで、あなた御自身は、そういうことに関して、どう思われているのですか？」
「そういうことと言いますと……」
「つまり、皆がいろいろ議論してもはっきりとはわからず、あなたの真意に関していろいろ取り沙汰しているという……」
「ある意味では当然かも知れません。私自身にもわからないのですから……」
「あなた自身にもわからない？」
「ええ、よく説明は出来ません。またそれが出来れば、こんな事件には到らなかったでしょう」
「それはそうかも知れませんが……」
「しかしある意味では、どうして私の抱いた気持がわからないのかという気持も強くあります。いらいらする程……」
「ほお？……」と私ははじめて、彼の心の奥の秘密につきあたった様な気がして彼の顔をみました。彼はその時下を向いていましたが、いきなりこちらに向き直って、目の奥底ま

でのぞき込む様に、私をみました。私は下に向き直り、低い声で、
「それでは、あなたのお気持なり、何なり、出来る丈すべてを私に話して頂けませんか。雑誌の記者といっても、決して無責任に記事にはしませんし、もしどうしてもあなたがお希みなら、私はそれを伏せておきましょう。ここでお伺いすることは、まったくプライヴェートな会話と考えて、その後、あなたの承認を得た上で、あなたの許可された部分だけ記事に致しましょう。それで御了解頂けますか？」
　彼はうつ向いたまま、ほっと息を軽くはいて、静かに、
「私としては特に、公開されて悪い様なことは一つもありません。すべて書いて下さって構いません。ただ、私の申しますことを、出来る丈その通りに書いて頂けるのならば……」
「それは無論です」
　しばらく彼は下を向いて黙っていましたが、やがて顔を上げると、目の前の、彼女の像を、じっと見つめていました。その視線が、やがて、その像を超えて、彼方を見つめる様なまなざしにかわると、軽くふるえる様な声で話しはじめました。

第二章

私がはじめて、彼女の存在をはっきりと認めたのは、事件からちょうど一カ月前になる春の盛りでした。フランス現代文学の講義を、私達は、大学の同じ教室――ダダイズムで受けていました。かなり遅れてその授業に加わったこともあり、それまで、私は彼女については、時々、授業のはじまる前、私の席の前を、ふっと通り過ぎていく、色の白い、背の高い女の子、という印象しかなく、しかも何かいつも、決まった男の子と連れ立って教室に入ってくる様に思われ、いずれにせよ、自分とは関係のない存在だと感じていました。無論顔をながめたこともありません。自分の前を通り抜けた後、どの辺に座わるのかも知りません。

しかしこの日は、その娘が、隣の席に座わっています。しかもきょうは彼女の順番なのか、時間がくると、メモ用紙をとり出して、やや高めの、軽くはずむ様な声で、研究発表をはじめました。彼女の息づかいが伝わってくる様で、その吐いた息を吸いこむ様に、深く息をした時、教授が、自分の隣に座わる様に彼女を促しました。

教壇の上に行き、腰かけようとした時、そのすらりとした姿勢、白くて長い首と、その下にある、よく発達した、ふくよかな胸が目に飛び込んできました。思わず、自分からは程遠い存在と感じ、また同時に、一度でもこんな女友達を持ちたいと思いました。少なくとも、今までには知り合ったことのない女性でした。

目の離せなくなったまま、みつめていると、透き通る様なその白い肌、整った、すっきりとした顔立ちのもつその気品と、それでいてどこか人なつっこい身のこなしにあらわれるそのやさしさに、フランス女性にみられる冷たさとは何か違ったものを感じました。やゲルマン的な顔立ちに、しかしドイツ女性でもないものを感じます。オーストリア人だろうか、ふとそんな気がしました。いつか目にした、チロルの雪のかかったアルプスの山を思わせるものを彼女はもっていました。でも、それとも違う……オーストリアでよく目にした、横に広い丸顔の女性とも明らかに違います。

やがて彼女は、ドイツ語のテキストを読みはじめました。「やはりゲルマン系なのか……」と思いました。よく通る、その美しい声のドイツ語の響きにききとれ、ますます彼女に魅かれていきました。しかし、じろじろみることの気づまりを、次第に感じはじめま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.